

あの日、群馬の森で
—追悼碑はなぜ取り壊されたのか—
手元資料

資料① 映画『あの日、群馬の森で』解説

【映画の解説】

ドキュメンタリー映画「あの日、群馬の森で
—追悼碑はなぜ取り壊されたのか—」

この国の20年の変化を、追悼碑は静かに見ていた一。

「群馬の森」にたたずむ追悼碑が取り壊された。
それは戦時中、日本で過酷な労働を強いられた朝鮮人労働者を悼む碑だった。
20年前、碑の設置を許可した群馬県は、いまや碑の存在が「著しく公益に反する」という。何があったのか。
その背景に浮かび上がったのは、負の歴史を“なかったことにしたい人々”の執拗な抗議運動だった。

全国に広がる歴史修正の動き。
碑はなぜ建てられ、そして取り壊されたのか。
ひとつの追悼碑を通して日本社会の変化を見る。
(映画『あの日、群馬の森で』案内チラシの解説より)

監督：三宅美歌 日下部正樹
撮影：背古謙司 内城悠介 関啓太 小林洋一
編集：高橋和己
音楽：津崎栄作 大野木千夏
2025年制作／79分／TBS
(『あの日、群馬の森で』案内チラシより転載)

【この映画を見て考えたいこと】

戦争への動きがざわめいていることを、多くの人が感じていることと思います。

だからこそ、戦争がどのようなものであったのか、そして「戦争をさせない」ためにどうしたら良いかを、後の世代に語り伝えようとするのだと思います。追悼碑に刻まれた言葉「記憶 反省 そして友好」。それは、アジアの平和と友好を願う思いを刻んだものでした。

この碑が「反日的」と批判され、それに応えて、自治体がこの碑を壊してしまいました。こうした戦争や加害の歴史の事実を消そうとする動きが各地で行われています。平和と友好を願うことがなぜ、どうして許せないことなのでしょうか？

今回の選挙を境に、外国人を排斥しよう、分断しようという言動が、政治の場で、公然とされるようになりました。一つの時代の変り目のような、暗い、不安な気持ちになっている方も多いと思います。

ファシズムの台頭する段階でのナチズムの動きや、戦争への道を歩んだわが国の歴史、その中での差別・分断を押し進めた社会。その時の人々の気持ちの動きを繰り返しているように思われます。これは私たちの未来につながる問題です。

もともとTBSの「報道特集」という番組の中で制作されたこのドキュメンタリー作品は、そうした私たちがはっきりしない形で不安に感じている今の社会の姿を考えさせてくれます。

【シネマDE憲法『あの日、群馬の森』】

「戦争の悲惨さを語り伝えなければ」「二度と戦争を起こさないようにするために」と、この夏、戦後80年の節目と言うこともあって、新聞でも、テレビでも、こうした見出しで、記事や特集が数多く取りあげられていました。しかし、「なぜそのような戦争が起きたのか」、さらに「戦争によって近隣諸国の人々に多大な被害を与えた『加害』への責任を問題にした作品はそう多くなかったように思います。

それだけでなく、いつまで戦争のことを謝り続けるのか、戦争による加害や虐殺などはじめからなかった、捏造だ、などといった言動も声高に露骨に語られるようになった夏でもありました。



なぜ、戦争が起こったのか、何が戦争に導いたか、人々の気持ちを動かしたものは何だったのか、なぜ動かされてしまったのか、そんなことを考えていた時に、この映画に出会いました。

映画は「戦前・戦中の朝鮮人強制連行とはどのようなものだったのか」「どのような人々の思いからこの追悼碑が建てられたのか」そして「どうして碑を撤去することを群馬県は言いだし、多くの市民の反対にもかかわらず、また裁判の判断も県側に同調して追悼碑の撤去に至ったのか」順を追っていねいに説明していきます。

とくに、撤去のきっかけとなった動きに、保守を標榜する団体などによるネットなどを利用した攻撃（電凸と呼ばれるもの）、「碑文は捏造だ」として設置を許可した県や県議会に集中攻撃を入れることによってネット上に呼びかけが広がったことも明らかにしています。

それを受けて県や県議会が撤去に向けて動くことになります。表向きは「追悼碑の存在自体が、論争の対象となり憩いの場である公園にふさわしくなくなったことから更新を不許可とする判断を示しました」

映画はまた、こうした朝鮮人強制連行の追悼碑などを撤去させようとする動きが、天理市大和海軍航空隊基地跡や長野県松代市大本営地下壕後の掲示板の撤去や「強制連行」の文字の削除などが行われていること、また関東大震災の朝鮮人犠牲者の慰霊祭妨害などにおいても行われると言う全国的な仕掛けが動いていることも取材しています。

そうした攻撃を行っている団体によって、全国各地にある負の歴史を刻む碑や看板を撤去しようと動いていて、それらは着実に成果を得ていました。各地でそうしたやり方で、脅し、脅迫に似た攻撃によってきっかけを作り、自治体や議会議員に嫌がらせのような攻撃をくり返してきました。

そしてそれらは、「強制連行」という言葉をめぐっては、それらの動きを追認するような形で管内閣は閣議決定で「徴用」と言い換えると決め、各地の自治体や教科書の記載がそれを追うという形になっています。彼らの主張は、朝鮮人慰安婦問題を明らかにしようとする活動への妨害と同じように、歴史的事実を否定し、そのようなことはなかったと主張しています。いわば、戦争を起こしたこと、それによってどのような悲惨なことを近隣諸国にもたらしたかを覆い隠し、そう主張することの口を塞ごうとしているのと同じです。そして、戦争を語り伝え、二度と戦争を起こさないようにと伝えていこうとするものを壊していきます。

戦争への動きがざわめいていることは、何となく多くの人が感じていることと思います。また今までも加害の歴史の事実を消そうとする動きがこうした形で行われ、それが今回の選挙を境に、外国人排斥しようという言動が、一気に公然とされるようになりました。

この映画から、今この国で、何が起きているのか、そして憲法が指し示している平和、人権、民主主義の問題について考えていきたいと思います。

(法学館憲法研究所ホームページ「シネマ・DE・憲法」
2025/9/1『あの日、群馬の森で—追悼碑はなぜ取り壊されたのか—』
https://www.jicl.jp/articles/cinema_20250901.html)

資料② ドキュメンタリスト・ダイアリーズ 三宅美歌さん

作り手たちの“生の声”をそのまま届ける企画「ドキュメンタリスト・ダイアリーズ」！作り手自らが作品で描くテーマや問題提起、想いなどを執筆した記事を紹介し、ドキュメンタリストの真髄と出会う＜きっかけ＞を提供します。
今回は、「第5回 TBSドキュメンタリー映画祭2025」上映作品『あの日、群馬の森で―追悼碑はなぜ取り壊されたのか―』の三宅美歌監督からご寄稿いただきました！



「一体どこの国のテレビ局だ！」 抗議の電話が 興味のはじまりだった

私はもともとバラエティ志望でテレビ業界に入りました。配属されたのは時事ニュースを全く扱わない生活情報番組。毎日が文化祭前日のような慌ただしい日々の中、自身もニュースを全く見ないような生活を続けていました。

ところが2014年。報道番組にいたチーフADが辞めてしまうという理由で、突如「報道特集」異動の白羽の矢が立ったのです。報道特集は1980年から続く硬派な番組でした。

報道特集に移ってほどなく、私はあることに面食らいます。それは、放送後の視聴者からの大量の抗議電話でした。その日は番組で元慰安婦の証言を集めていました。「裏付けはあるのか！」「一体どこの国のテレビ局だ!!」——。いつもとは異様に違う電話の量に、この関係のテーマには何かとても厚い層があるように感じたのです。

のちにそうした“負の歴史に抗議する人たち”の存在をはっきりと認識する現場に出くわすことになります。

“負の歴史に抗議する人たち”の存在

2017年、東京・墨田区の関東大震災 朝鮮人犠牲者追悼式。関東大震災の混乱の中、デマを信じて朝鮮人を虐殺した史実に日本人が向き合い続けてきた式典です。この年、小池百合子東京都知事が式典への追悼文送付を取りやめると表明したことに大きな反発が起き、番組でも取り上げることになりました。

東海地方で育った私は、関東大震災での虐殺について学んだことがありませんでした。1次資料などを撮影して回る中で、当時起きた集団の“狂気”に衝撃を受けていきます。日本人の手で碑が建てられ、追悼が続けられてきたことに、なんだか救われるような思いにもなりながら、式典の撮影をはじめました。

会場となっている公園に、警察と対峙している人ばかりがありました。その先で、虐殺の史実を否定する人たちが別の集会を開いているといいます。奥に見える垂れ幕には「日本人の名誉を守ろう」とありました。のちにその主催団体について調べると、全国各地にある負の歴史を刻む碑や看板を撤去しようと動いていて、実際に撤去された事例が数多くあることを知りました。主催団体側のホームページを読みながら、いろいろな疑問が私の中でざわざわと沸いてきました。

「反日日本人の手による自虐史観」—？

「誹謗中傷を私たちの先祖に対して行っている」—？

その先祖が残したいと思って建てたものではないのか？？？

ちょうどその頃、群馬県にある追悼碑の存続が裁判で争われていました。採用されないかも、と思いながらネタ案として会議で話題に出すと、「ショートニュースでは扱えない複雑な話こそ、尺のとれる番組が取り組むべき」との先輩方

の後押しを受けました。アジアの歴史に知見の深い日下部キャスターにバックアップに入ってもらい、取材を始めてみることにになりました。

歴史ネタのハードル

群馬の追悼碑裁判は、日韓関係が“戦後最悪”に冷え込む真只中で進んでいました。期限は決めず、当時の資料、遺跡、現場を見聞きしていた人達たちなど、1次資料に近いものを収集することに最も時間をかけました。

残念ながら、群馬に動員された経験のある朝鮮半島出身者は、すでに一人も存命しておらず、直接話を聞くことは叶いませんでした。しかし、その方たちが生きている間に聞き取った記録映像で公になっていないものがいくつか見つかったのです。戦後75年という時間のハードルとともに、記録はきちんと残しておくべきだということをひしひしと感じました。

一方で、史実を否定している人たちが何を主張しているのかも随時チェックするようにしていました。彼らも彼らで、さまざまな資料を提示して、彼らなりの歴史の解釈をしているのです。「何年も前のことを、子供たちにずっと謝罪させ続けるつもりか」「伝え続けることが、むしろ日韓の友好を妨げている」との彼らの主張には、そのほうが問題解決につながるだろうか？、と私自身もずっと考えをめぐらせてきました。

ただ、取材を経た今、「繰り返さないために伝え続ける」ことを選んだ多くの日本人たちがいて、その姿に「救われる」気持ちになった多くの朝鮮の人たちがいた、ということを確認しておきたいと思います。

対立する問題への萎縮

論争に巻き込まれそうだから・・・と撮影を拒否されることもたびたびありました。

追悼碑の撤去工事の撮影をめぐっても、群馬県側のかたくなな対応が印象に残っています。

県は主に「工事の安全性」「近隣住民への影響」を理由に、工事の撮影を拒否しつづけてきました。代執行の決定は地元紙の1面トップで扱われていて、地元の記者たちは高い関心をもって撮影交渉を続けていました。

「あれだけ広い公園なのだから遠くからの撮影なら問題ないのでは？」

「1社だけが公園に入る、代表撮影ならどうか？」

「県が撮影したものを各社に公表するのは？」

と譲歩しながら提案するも、最終的には「代執行開始と終了を宣言する様子のみ県が撮影し提供する」という形になりました。

仕方なく、私たちはヘリを飛ばして上空から撮影を試みることにしました。ただ、制作予算のことを考えると、飛ぶのは1回きりにしておきたい・・・。いつ飛ばすのが良いか、考え抜いたあげく、作業3日目の上空を目指すことにしました。しかし、すでに現場は更地に。追悼碑の残骸とみられるものは、大きなビニールシートで覆われていました。

のちに群馬県への情報公開請求で手に入れた写真を確認すると、夜中とみられる暗い時間帯に取り壊し作業をしたことが読み取れます。群馬県は相当ハレーションに気を遣っていたのですね・・・。

映画へのPR

当時を知る世代が、後世に伝えたい・決して繰り返さないという思いで残したものを、当時を知らない世代が、無下に取り扱っていいのだろうか？

この違和感が、取材の起点です。

「20年の変化を追悼碑は静かに見ていた」と付けたキャッチコピーのように、さまざまな考え・立場の人たちが追悼碑前で行き交った月日を俯瞰して見る気持ちで作りました。

ともに考えるきっかけになれば嬉しいです。

(D会議室 ドキュメンタリーを語ろう【ドキュメンタリスト・ダイアリーズ #5】より転載させていただきました。
<https://dmeetspj.com/column/4827>)

資料③ TIMELINE「記憶、反省、そして友好」の追悼碑

【群馬県内の朝鮮人強制労働の現場】

1942年1月～1945年2月28日

岩本発電所導水トンネル工事

【導水トンネル】

15kmの導水路の唯一地上に出ている部分。利根川上流から山をくりぬき、水を引いている。

【岩本発電所】

戦後、東京電力によって稼働、現在に至る。

1945年3月1日～1945年7月末

中島飛行機後閑地下工場

中島飛行機小泉工場の疎開のために作られた。地下壕は山に面して16本、深いものは150m。トラックが入れる幅。20本ほどの横坑が基盤の目のように掘られた。通過する電車の窓からこの工事が見えないようにヨロイ戸が締められた。地下工場の跡は、県内では陸軍の3工場も含め、7箇所発見されている。

1943年3月9日開発・1944年12月開山・1965年閉山

群馬鉄山

戦争末期、海外からの鉄鉱石の輸入が途絶え、政府と軍部の強い要請で日本鋼管鉱業が開発。極寒の中、重労働を強いられた。朝鮮人労働者と囚人が働かされた。

1942年10月～1945年1月開通

国鉄吾妻線・太子線工事

群馬鉄山の鉄鉱石を京浜工業地帯に搬出するための建設。閉場なら10年もかかる工事をわずか2年で完成させた。長野原線（現吾妻線）は上越線の渋川から長野原を結ぶ。太子線は、長野原から鉄石集積所のある太子までの引き込み線であり、日本鋼管鉱業の社線（1971年廃線）

「記憶、反省、そして友好」の碑について

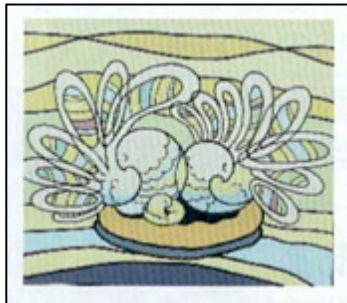
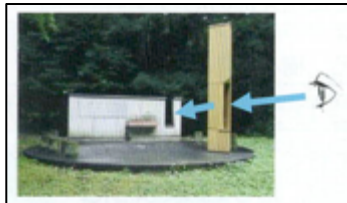
追悼碑は、2004年県立公園「群馬の森」に建てられた。「群馬の森」は陸軍岩鼻火薬製造所跡地であり、ダイナマイトや火薬を製造していたところである。その火薬製造所を空襲から守るため、朝鮮人を動員し、沼田市上川田に地下工場を作らせたという経緯もある。

こうした、加害の歴史と関係する県立公園に、記憶、反省、謝罪、平和を求めるモニュメントが存在する意義は大きく、群馬県民の良心であり、誇りであったのではないだろうか。

追悼碑設計への思い

追悼碑は、円形状の羅針盤の土台の上に建てられている。

それは異国の地で亡くなった朝鮮人犠牲者がせめて魂だけでも迷わず故郷へ帰れるようにとの思いからの設計。



黄色の塔のスリットから碑の隙間を見通せば、朝鮮半島の方向を見ることができるようになっている。（上の図）

黄色の塔からは、合掌して謝罪している姿が浮かぶ。

また、子どもたちへ明るい未来の警鐘、平和の願いを込めたハトの柄のプレートも、追悼碑に組み込まれている。（下の図）

「群馬の森」朝鮮人犠牲者追悼碑をめぐる経緯

- 1995年 「戦後50年を問う群馬市民行動委員会（アクション50）」を結成し、県内に於ける実態調査を開始。資料として冊子にまとめて発行。
- 1998年 「朝鮮人・韓国人強制連行犠牲者追悼碑を建てる会」結成。
- 2001年6月 県議会に**追悼碑建立に関する請願を提出。全会一致で趣旨採択。**
県立公園「群馬の森」内に土地を提供することを確約
- 2002年 県との碑文の協議。県より「強制連行」を「労働動員」に修正を求められる。
- 2004年4月 県立公園「群馬の森」に**追悼碑建立。**
- 2012年 「碑文が反日的だ」として撤去を求める電話やメールが届き始める。
一部右翼団体が碑の前で横断幕を揚げ、公園の職員と争う事件が起こる。
- 2013年 県は右翼との衝突を懸念して追悼式の公園使用を不許可→別会場で行う。「守る会」は県に追悼碑設置期間を更新する申請を行う。
- 2014年 県議会には右翼団体が碑の設置許可取り消しを求めて請願（3件）。
県議会は請願を賛成多数で採択、「守る会」に碑の自主撤去を要請。
県は碑の設置許可の**更新に対して不許可**とする。
「守る会」は、県の処分取り消しを求めて前橋地裁に訴訟を起こす。
- 2018年2月 前橋地裁 **不許可処分を取り消す判決。**
県は東京高裁に控訴。
- 2021年8月 東京高裁 **不許可処分を認める判決逆転敗訴**
- 2022年6月 最高裁 **上告棄却**（高裁判決確定）
- 2024年1月 県より「代執行令書」（1/29～2/11の間に執行予定）届く
29日行政代執行 追悼碑解体・撤去

追悼碑建立にあたって

20世紀の一時期、わが国は朝鮮を植民地として支配した。また、先の大戦のさなか、政府の労働動員計画により、多くの朝鮮人が全国の鉱山や軍需工場などに動員され、この群馬の地においても、事故や過労などで尊い命を失った人も少なくなかった。

21世紀を迎えたいま、私たちは、かつてわが国が朝鮮人に対し、多大の損害と苦痛を与えた歴史の事実を深く記憶にとどめ、心から反省し、二度と過ちを繰り返さない決意を表明する。

過去を忘れることなく、未来を見つめ、新しい相互の理解と友好を深めていきたいと考え、ここに労働動員による朝鮮人犠牲者を心から追悼するためにこの碑を建立する。この碑に込められた私たちのおもいを次の世代に引き継ぎ、さらなるアジアの平和と友好の発展を願うものである。

2004年4月24日

「記憶 反省 そして友好」の追悼碑を建てる会



（このページの解説は、2024年高麗博物館企画展『「強制連行」「強制労働」の否定に抗う～各地の追悼・継承の場を訪ねて』図録12～13ページより転載し、一部表現を変えました）

資料④ 朝鮮人労働犠牲者の追悼碑を訪ねて

朝鮮人労働犠牲者の追悼碑を訪ねて

日本全国に設置されている朝鮮人・中国人の追悼碑・遺跡説明板の調査によると約300基の追悼碑・説明板、約130基の碑文・説明板が把握され、そのうち約70基に「強制連行」「強制労働」「徴用」「労務動員」などと強制連行・強制労働を明示してあります。

追悼碑の対する憎悪をあらたにし、傷つけたり設置を妨害するなどの行為は2013年までには10件程度だったものが、2014年に至っては1年間で7件に急増しています。

追悼碑の更新拒否、説明板撤去、説明文の修正が続発するなか、とくに群馬の森追悼碑の更新拒否の理由は在日朝鮮人から同胞の苦難を偲ぶよすがとしての追悼碑を奪い、嘆くことさえ許さず、日本人には慰みの場を保障しようという排外主義の局地ではないでしょうか。朝鮮を植民地支配し、民族抹殺のために言葉を奪ったのと同様だと思います。追悼碑は不当な殉職を受けた人々（時代）と現在を生きる私たちの交差点です。そこには、侵略戦争に対する心からの反省があり、反戦平和運動を支える思想的軸があると思います。

（参考：須磨明「強制連行追悼碑の調査結果から」）

北海道 笹の墓標展示館 願いの像

秋田県 大館市 花岡事件中国人強制連行追悼碑

群馬県 群馬の森追悼碑跡

神奈川県 相模湖ダム追悼碑跡

長野県 松代大本営の追悼碑

富山県 黒部川電源開発の追悼碑

兵庫県 宝塚市須藤・鉄道工事事故追悼碑

神戸電鉄施設工事労働者の像
（強制動員前史の朝鮮人犠牲者）

広島県 安野中国人受難の碑

福岡県 北九州市 小田山墓地

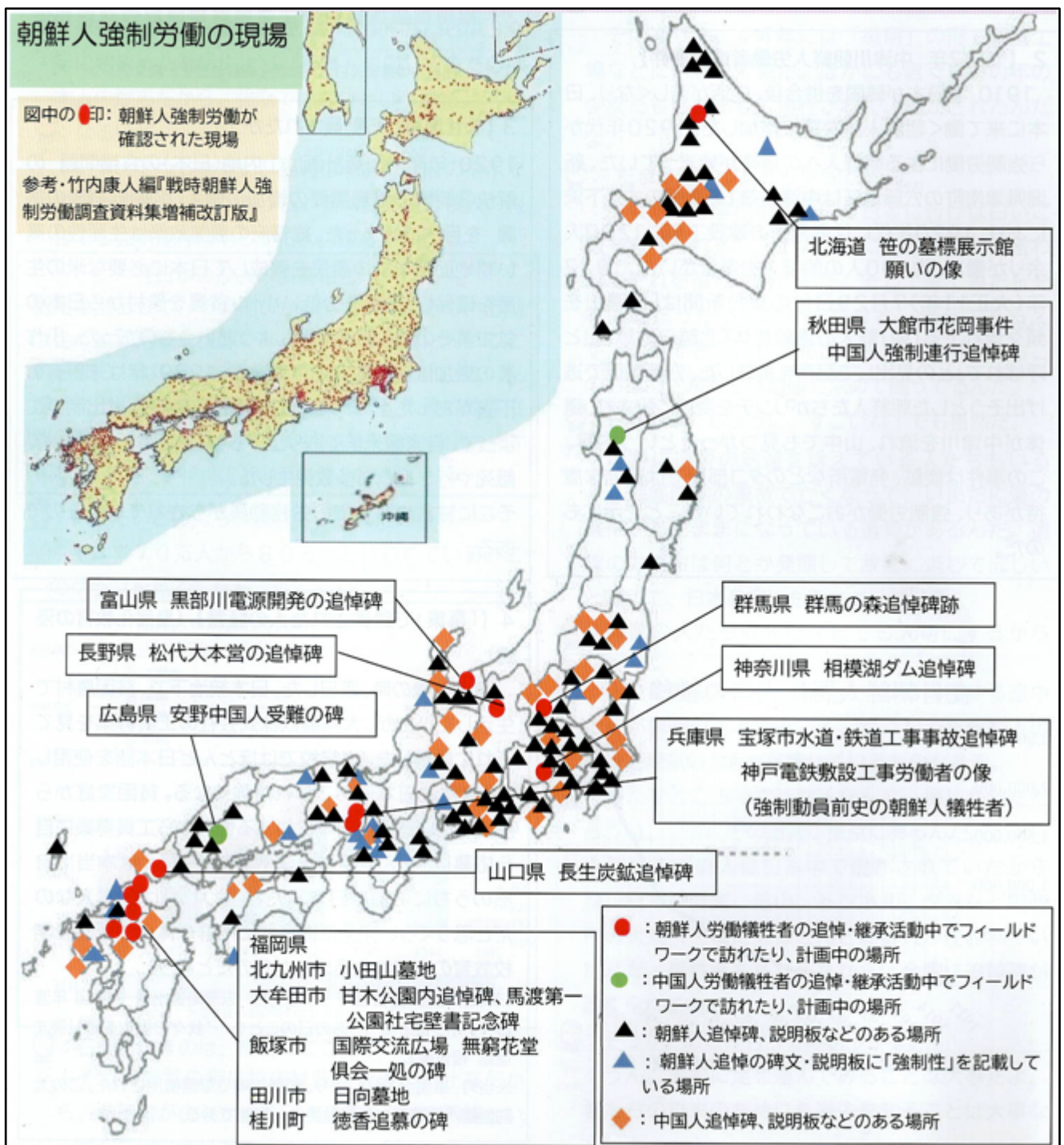
大牟田市 甘木公園内追悼碑、馬渡第一講演者宅壁書
記念碑

飯塚市 国際交流広場 無窮花堂 俱会一処の碑

田川市 日向墓地

徳香追慕の碑

（2024年高麗博物館企画展【『「強制連行」「強制労働」の否定に抗う～各地の追悼・継承の場を訪ねて』図録 4ページより転載させていただきました。）



Editorials

2024 • 1 • 30

歴史の証し 確かにあった

壊された朝鮮人追悼碑①

現場へ!

スマートフォンで、手元にある紙に印字されたQRコードを読み取ると、その手元の小さな画面に、群馬県によって撤去された朝鮮人追悼碑が浮かび上がったのだ。

の元教員、川口正昭さん(65)が説明する。スマホの画面には、「記憶 反省 そして友好」と刻まれたかつてのモニUMENTが、はつきりと映し出されていた。

の県議らにかけあった。県議会の全党派が賛同し、碑を県有地である県立公園につくることが決まったのだという。ところが、そこらが大変だった。碑の名前をどうするか。碑文にどう刻むのか。

ための土塁などがある。碑を建てた公園は、戦争にゆかりがある場所だった。日本人も犠牲になったから、同じ園内に朝鮮人を悼む碑を建てれば、戦争の悲惨さとその教訓を後世に伝えられるという願いをこめたという。

「群馬の森を散策しながら碑に出会い、過去にこういう歴史があったのだと知るきっかけになればと、碑に友好を結ぶ未来を託したのでです」

この日、フィールドワークに参加した前橋市の女性(36)は、子どもたちと遊んでいた公園が、戦争にまつわる場所だと初めて知った。「つくづく歴史と向きあつてこなかったと感じたので、歴史をひもとく語り部と共に、子どもたちとまた歩いてみたい」

一行がスマホをかざした更地の場所をたずねると、野の花が置かれていることがある。「いまも碑に心をよせてくれる人がいることがわかります」と川口さん。

この広大な公園の片隅に、たしかに碑はあった。忘れてはならないと誓いをたてた、「記憶 反省 そして友好」と刻まれた朝鮮人追悼碑が、1年半前までは。(高木智子)

「これは、すごい」「ほら、追悼碑が見える」戦後80年の夏を控えた6月20日、群馬県高崎市にある県立公園群馬の森で市民団体が開いたフィールドワーク。雑草が生い茂ったエリアで、一行から歓声があがった。スマホ

AR(拡張現実)の技術によって再現された碑。画面から目を外すと、そこには更地が広がるだけである。「物体としては失われましたが、ここにくればスマホでみることでできるんです」と、案内役

の元教員、川口正昭さん(65)が説明する。スマホの画面には、「記憶 反省 そして友好」と刻まれたかつてのモニUMENTが、はつきりと映し出されていた。

の県議らにかけあった。県議会の全党派が賛同し、碑を県有地である県立公園につくることが決まったのだという。ところが、そこらが大変だった。碑の名前をどうするか。碑文にどう刻むのか。

ための土塁などがある。碑を建てた公園は、戦争にゆかりがある場所だった。日本人も犠牲になったから、同じ園内に朝鮮人を悼む碑を建てれば、戦争の悲惨さとその教訓を後世に伝えられるという願いをこめたという。



①ARの技術でスマホに再現された碑を見る参加者
②スマホに再現された朝鮮人追悼碑
③群馬の森を案内する川口正昭さん
川口正昭さん(65)は、群馬県高崎市



この日のフィールドワークで、川口さんは一行に公園内を案内した。ジョギングを楽しむ人、散歩する家族、ベンチで語らう人々……。市民が憩い、語らう場のそばには、ダイナマイト発祥の碑や陸軍火薬製造所の跡、爆風を防ぐ

重機が砕いた市民の思い

壊された朝鮮人追悼碑②

現場へ!

日から公園を全面封鎖して撤去することを確認した。

撤去の当日。現場となった群馬の森は、隅々まで24時間態勢で警備員が配置され、重々しい空気が漂っていた。

東京ドームが五つ以上入る広さがある公園の周りは全面的にシートなどで目張りされ、中の様子をうかがい知ることはできなかった。

2年前のクリスマス。群馬の山本一太知事(67)以下、副知事や担当部長ら10人が顔をつきあわせていた。

朝日新聞社の情報公開請求で入手した資料によると、重

機が追悼碑を砕いていったのは29日の夜のこと。投光器で照らされたコンクリートの碑が解体されていく様子が写真に残っていた。

日本が植民地支配した歴史を忘れず、朝鮮人の犠牲者を心から追悼するための碑だった。由来を刻んだ碑文こそ事前に取り外してもらったが、碑は公園から撤去された。

「死者の尊厳をふみにじるもの」。着の身着のまま運

れてこられて働かされたという朝鮮半島出身の男性に話を聞いた、元大学教員の加藤昌



朝日新聞の請求に対して群馬県が一部黒塗りて公開した、重機で解体される朝鮮人追悼碑の写真

碑にあった「記憶 反省 そして友好」と刻まれたプレートは取り外され、市民団体の手元に戻った

更地になった現場で、花を手向ける岡田千枝子さん(右)＝群馬県高崎市

戦後80年をむかえ、東京、奈良、沖縄、北海道、遠くは韓国・ソウルなどから、碑が撤去されたいきさつを知りたいとの声が、かかわってきた人々のもとに届く。

群馬と同様、鉾山や発電所、軍需工場などで朝鮮人が犠牲になった歴史を伝える市民団体は危機感をもち、また

多文化共生や人権に詳しい学者、支援者らから講演やフィールドワークの依頼もあり、ネットワークが広がった。

若い人たちの目にはどう映るのか。コリアンタウンがある東京・新大久保で話を聞いた。会社員男性(24)は「地域住民には在日の方も多いのに、気持ちよくんだのだろうか」、女子大学生(22)は「埋もれている歴史を知りたいから、残せる道を話しかけたい」と語った。

「群馬県が撤去して、かえって碑のことが世に知られた。皮肉なことだけれど」と、旧追悼碑を守る会の藤井保仁さん(76)は言う。

今年5月17日。新しい会が発足した。かつて集めた戦争経験者らの証言や資料をもとに、負の歴史と向きあう活動を進めるという。

翌日、現場にいったみると、都内に住む元教員、岡田千枝子さん(74)の姿があった。梅雨の晴れ間、雑草をぬき、手にはタンポポや野の花を握っていた。碑という主を失った更地に花を置き、手をあわせた。祖国に帰ることができなかった人々を思っている。

(高木智子)

いまでも残る 労務動員の跡

壊された朝鮮人追悼碑③

現場へ!

れ、耐えられなくなった。
「あれだけ苦労してつくったのですから」

戦後50年を迎えた1995年ごろだった。慰安婦にされた女性の支援にかかわり、地元に残されている歴史に目をむけた。鉾山やトンネル、軍需工場など戦時中に朝鮮人が働かされていた場所へ、郷土史の本などを手がかりに証言をもとめて尋ね歩いた。当時

「朝鮮、中国などアジアを侵略したことへの反省でした。それなのに……」

群馬県立公園群馬の森（高崎市）の片隅にあった朝鮮人追悼碑が、跡形も無くなった。更地になった現場を見た矢中幸雄さん（82）は涙があふ

はまだ、聞きにいけば、宿舎

として使われた建物を教えてくれる住民が健在だった。矢中さんらは、市民の手で証言や記録を掘り起こす作業を続けた。軍需工場だった中島飛行機に関連した資料にあ

た。トンネル近くの寺の過去帳や埋火葬の名簿には、出身地に朝鮮半島の地名が書かれた人々の名前や亡くなった理由が載っていた。

なぜ彼らは異国の地で命を落としたのか。犠牲者を追悼しなければ。教訓を伝えよう。一緒に地域の歴史を掘り起こした人々からこんな声が

「戦争を知らない世代だからこそ耳を傾けるべきだ」と語る矢中幸雄さん（群馬県安中市）

危機感を覚えた元教員らによる「消し去られた歴史をたどる」と題したフィールドワークが今年5月にあった。目的地は、長野との県境に近い群馬鉄山。かつて矢中さんらがたぐりよせた「強制労働をさせられた朝鮮人が証言した場所」のひとつだ。

草津温泉を通過し、さらに車を進めると草津白根山をのぞむ旧六合村のチャップミンコケ公園についた。戦争末期、動員された朝鮮人によって鉄



「戦争を知らない世代だからこそ耳を傾けるべきだ」と語る矢中幸雄さん（群馬県安中市）



群馬鉄山の鉄鉾石を運んだ太子駅の遺構。太子駅の遺構をまわるフィールドワーク。群馬鉄山の跡地もめぐった。いずれも群馬県中之条町



動員された朝鮮人によって鉄

鉾石を露天掘りで採石していた群馬鉄山の跡地という。公園の名が示すとおり、一面に苔が生じ、ところどころに赤い鉾床がみえるものの、かつての面影はない。説明板に、旧太子駅に鉄鉾石を運んだとあるが、朝鮮人の労働については書かれていない。

だが六合村誌によると、資材や労力すべてが不足する戦争末期、朝鮮人300人が入山。60歳近い人もいた。刑務所の囚人も加わった。零下20度になる寒冷地。セメントを練る水、鼻水、まっけも凍る過酷な現場で、ドングリ団子で食いつないだ記述がある。

掘り出された鉄鉾石は索道で結ばれた旧太子駅へ。貨車に積み替えられて、現在のJR吾妻線を通じて出荷されたという。遺構もあったが、戦後80年がたち、公園とともに、観光地になっていた。

ガイド役の元教員はこう結んだ。「朝鮮の人が動員されてつくった線路を、いまでも私たちは使っているんです。無関係といえますか」。参加した女性（80）が答えた。「戦争が終わって、働かされた人たちが放り出されたかと思うと、言葉がありません」（高木智子）

2025年(令和7年)7月17日(木)

第3種郵便

保守層に勢い 環境が激変

壊された朝鮮人追悼碑④

現場へ!

判断をした14年当時の大沢正明さん(79)だ。

5月、記者は大沢さんに会いに行った。県が代執行で撤去したことを伝え、がれきになつた碑の写真をみせた。

朝鮮人追悼碑は2004年4月から約20年間に、群馬県立公園群馬の森に存在した。

その間の群馬県のトップは3人。撤去のゴーストを

出した現職の山本一太知事

(67)、建立時の小寺弘之さん

(故人)、そして碑撤去の初

決めた出来事は覚えていた。

これは「と驚き、「移転したかと思っていた」と語った。

退任して6年。碑のことはすっかり忘れていたという

が、建てた経緯や撤去方針を

決めた出来事は覚えていた。



群馬県庁に飾られている歴代知事の写真。左が大沢正明氏、中央が小寺弘之氏

追悼碑を撤去した山本一太・群馬県知事

群馬県立公園群馬の森に建てられていた朝鮮人追悼碑
2024年1月、同県高崎市

碑を建てた当時は自民県連幹事長で、革新系の県議が自民の長老県議を口説いて話が

始まった。戦争を経験した世代の先輩が進めたこと。公有

地に建てたいという希望がかなうよう、市民団体が「強制連行」という言葉を使わな

いと歩み寄るなか、設置許可に「政治的行為を行わない」

条件をつけることで党内をまとめた記憶があるという。

だから知事在任中、碑の前で開いた追悼式典で「強制連行」と口にした人がいて、そ

れが「政治的活動」にあたると

問題視されているという報告

をうけたときは憤慨した。「努力が無になるじゃないか」

碑の設置許可を更新するか、判断が迫られていた。置

くときは全会一致で賛同した

県議会が、今度は撤去を求め

る保守系団体などの請願を賛

成多数で採択。県は更新を不

許可とし、碑を管理する市民

団体が処分取り消しを求めて

提訴した。

大沢さんは「建てさせてほ

しいといった側が、約束を破

った。だから(更新)許可し

なかった。シンプルなこと

と強調したが、碑をとりまく

環境は大きく変わっていた。

海外では慰安婦の少女像が

建てられ、北朝鮮による拉致

問題も解決しないまま横たわ

る。時の首相は安倍晋三氏

で、保守層は勢いづいてい

た。ある自民県議は「ナショ

ナリズムの高まりが判断に直

結したか分からないが、碑へ

の批判を、おさえきれなくな

ったんじゃないか」とみる。

大沢さんにいまの心境をき

いた。朝鮮人も働いた中島飛行機があつた街で育つた。幼

いころチマ・チョゴリを着て朝鮮学校に通う生徒を目にした。「なぜ彼らがいるのか、朝鮮半島の方が引く張られてきて、大変な思いをしたのはみんな知っていること。歴史のページとしてしっかりと残すべきだけれど、こういう結果じゃ、碑がみじめになる。どこか慰霊できる場所で大事にすべきじゃないか」

碑をめぐる裁判は22年の最高裁の決定で、県の勝訴が確定して決着した。山本知事は24年1月、司法判断を根拠に代執行によって撤去した。

碑が壊されたのは、存続を求めた市民団体による新たな裁判の口頭弁論直前だった。

在日韓国大使館側が円満な解決にむけて知事に話し合いを求めていた途中だった。野党系の県議経験者は「碑がないにこしたことはない、知事は思ったんだろう」と言う。

「碑は否定しないが、ルール違反が問題」と大沢路線を継承した山本知事は、加害の歴史を伝え教訓をくむ場が失われることについて、代替案を問われると、こう答えた。

「特別に歴史の話を発信することは考えていない」

(高木智子)

形としてあることの意味

壊された朝鮮人追悼碑⑤

現場へ!

学していた。行列の間をぬって、「その碑」を探した。静かな木立にたたずむ、いくつもの慰霊碑をくぐりぬけ、すぐに韓国人原爆犠牲者慰霊碑はみつかった。



群馬県では公園から朝鮮人を悼む追悼碑が撤去された。ところが、碑が公園の外から中へと移された例もある。広島市の平和記念公園だ。6月中旬、原爆ドームの前では、修学旅行の児童生徒やインパウンドの観光客らが見

神話上の動物、玄武がかたどられた台座の上に5枚の碑がそびえたつ。ハンゲルと日本語と英語で記された慰霊碑の由来には、こうあった。「悲惨を強いられた同胞の霊を安らげ、原爆の惨事を二

度とくり返さないことを希求しつつ、平和の地、広島の一隅にこの碑が建立された」この碑は1970年に在日の被爆者によって建てられたが、当時、公園内に建立することがかなわず、対岸にある橋のたもとに留め置かれ、狭い所で式典が行われていた。同じ原爆による犠牲者なのに、なぜ公園の外なのか。

被爆2世の権俊五さん(76)は「平和の公園じゃけん、被害者の立場として、日本人と同じにして欲しい一心でし」と振り返る。

公園に目を向けてみる。「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」と平和を誓う代表的な慰霊碑や、2歳で被爆し12歳の時に白血病で亡くなった佐々木禎子さんにちなんだ原爆の子の像、原爆供養塔などを見学した人が、この韓国人犠牲者の慰霊碑でも足を止めていた。ガイドの説明に耳を傾けてみた。

「なぜ被爆者に朝鮮半島の人があるのか、わかりますか」「戦争で連れて来られた人たちがいたんですね」韓国の仁川から来ていた女性(41)は「忘れられなくてよかった」と言い、釜山から来た男性(30)は「慰霊なのだから、日本人も韓国人もどの国



平和記念公園にある韓国人原爆犠牲者慰霊碑には、多くの人が足を止めていた＝広島市



元広島市長の平岡敬さん



権俊五さん

「日本人の犠牲を悼む碑なら撤去しますか」「公園の外におきますか」。権さんのことは重く響いた。〃おわり

いまだ約25年前、公園内への移設を認めた当時の広島市長、平岡敬さん(97)に会いに行った。平和公園にあるさまざまな慰霊のモニュメントに長い列ができていた様子を伝えると、こう語った。「形としてあることは大事。形として存在すること、目に見えて、そのことをたえず思い出し、忘れないようにする。そのきっかけが碑、モニュメント。存在することが大事なんです。そういう慰霊の碑を撤去するとは歴史修正にはかならない」公園に入った碑もあれば、壊された碑もある。

「日本人の犠牲を悼む碑なら撤去しますか」「公園の外におきますか」。権さんのことは重く響いた。〃おわり

*朝日新聞2025年7月18日(夕刊)記事「現場へ!」『壊された朝鮮人追悼碑』より転載させていただきました。

資料⑦ 「群馬の森の追悼碑」撤去以降をふり返って (1)

「群馬の森の追悼碑」撤去以降をふり返って

戦後80年を問う群馬市民行動委員会 (略称:アクション80)
事務局長 川口 正昭

1. 追悼碑が解体・撤去された

群馬県高崎市の群馬の森にあった「記憶 反省 そして友好」の追悼碑は、2024年1月29日からの県による行政代執行によって解体、撤去された。「追悼碑を守る会」は代執行令書に書かれた期日ギリギリまで法的に代執行を止める手段を探ってきたが、それも叶わず、県は、「守る会」の立ち合いも拒み、群馬の森を完全に封鎖して作業を行った。2月3日には、碑の建っていた場所は更地になっていた。

2. 「守る会」の総括と解散

追悼碑を管理してきた「追悼碑を守る会」は、2024年5月11日に開いた総会で、「先人がとりこんできた活動は、追悼碑がなくなっても色あせることはない」と総括した。また、歴史の事実を直視しなければ真の友好関係は築けないという「アクション50」からの考えを引き継ぐ「新たな団体」を立ち上げることを確認して、解散した。

県は撤去費用を「守る会」に請求し、それまでの活動に資金を使い果たした「守る会」から、残っていたわずかな資金を差し押さえていった。

3. 追悼碑撤去後の波紋

群馬の森の追悼碑が解体・撤去されたことは、県内だけでなく国内外に広く報道され、韓国では主要メディア8社がトップニュースで伝えた。また、朝日新聞と信濃毎日新聞は県による撤去を非難する社説を書き、多くの識者によって県の行為を問題だと論評する記事が掲載されたり、テレビやラジオでコメントされたりした。

私たちのところにも、講演・報告・フィールドワークの依頼がたくさんくるようになり、分担して応えてきた。



← 碑の撤去後も続く
フィールドワーク
(2025年5月群馬鉄山跡)

また、TBSが報道特集などで3回、追悼碑のことをとり上げて放映し、さらに、ドキュメンタリー映画祭2025でも「あの日、群馬の森で一なぜ追悼碑は取り壊されたのかー」が上映された。

追悼碑が撤去されてから1年半経つが、人々の関心は薄まるどころかますます広まり、知事や県の問題点を深く考えるような活動が県内外で続いている。

4. アクション80準備委員会

私たちは、旧「守る会」に届く依頼や連絡に有志で分担して応えながら、新しい仲間も加わって活動を続けてきた。また、5月の総会で確認した「新たな団体」の立ち上げに向けて議論を始め、結成のための準備とプレ企画として集会を2回開くことにした。8月から、「新たな団体」の名称を先人のつくった団体名「アクション50」と戦後80年にちなんで「アクション80」とすることとし、準備委員会として結成に向けて準備を進めていった。

5. 第21回追悼集会/アクション80結成総会

今年5月17日、これまで「守る会」が開いてきた追悼集会を、「アクション80準備委員会」主催で開いた。集会後、結成

総会を開き、準備委員会として行ってきた活動を報告し、議事ではアクション80の結成趣旨、会則案、活動方針案、予算案、役員案を提案し、8名からの質問や意見に答えた後、承認された。団体名は「戦後80年を問う群馬市民行動委員会」(略称:アクション80)としたが、これも1995年に先人がたちあげた団体名にちなんだものである。

6. やはり政府・県・裁判所はおかしい

昨年の碑の撤去から時間が経ち、講演や報告をする機会ごとに撤去に至る経緯を深く調べるようになると、「守る会」、その前の「建てる会」「アクション50」に問題があるのではなく、政府や県、そして裁判所に問題があるとの確信が一層強くなった。その一部を述べる。

まず、政府については、第二次安倍政権発足で文科大臣になった下村博文が教科書検定基準に手を付け「近現代史の記述は政府の見解や裁判によること」とし、これが菅政権に維新の馬場伸幸が出した質問主意書への答弁書「『強制連行』ではなく『徴用』とするのが適切」とする閣議決定に結びつき、教科書を書き換えさせた。まさに、政治が学問研究の世界に口を出し、教科書を政府広報のように扱い、歴史を歪めた事実である。この国は全体主義国家ではない。

県についてはあげるときりがなく出てくる。2012年5月から「そよ風」(撤去を求める団体)の「碑文が反日的だ」との抗議に対して「碑文は問題ない」と対応していた県が、翌年12月になると、除幕式(2004年)や追悼式(2005年、06年、12年)でのあいさつで使われた「強制連行」という言葉を問題視し、翌年、「守る会」のルール違反だとして碑の設置許可を更新しなかったことだ。このあいさつはいずれも「朝鮮新報」に載った記事から知った県が、問題視したものだが、これは碑をなきものにしたい県が、後からあら捜しして見つけたものだと言えよう(「表現の自由」市川正人: 岩波新書)。共同通信はこれを「県によるあと出し」と報じている。

まだある。県は裁判で、碑文をめぐる「守る会」との協議の中で「強制連行」を「労働動員」に変え、それをもって、「守る会」は集会で「強制連行」の言葉を使ってはならないということを確認していたと訴えた。碑文の協議に参加した当時の「守る会」事務局長は、碑文の協議では「労働動員」としたが、集会の話などは一切なかったと証言している。県の主張はでたらめ。

山本知事も、県民を欺く発言を定例会見でくり返していたことがわかった。碑の撤去前に、韓国大使館の職員が県庁を訪れ、知事との面談を要請していたことが報道された。しかし、知事は「公式な要請はなかった」と答え県民を欺いた。碑の撤去後、「今度は会う」と答えたが、その後、「全て公開で行いたい」と大使館が受け入れがたい条件を出し、結果として面談は行われなくなった。これは、知事が面談を避けるために工作したことと考えざるを得ない。

裁判所については、こんな裁判所ばかりではないと思う。追悼碑裁判における裁判所はひどいと言わざるを得ない。すでに確定した判決と違う判断を行う場合には、前の判決について言及するのがルールである。最高裁第一小法廷が2007年11月に、「徴用され、朝鮮半島の居住地から広島まで連行された元徴用工」への被爆者援護に関する裁判の判決文の冒頭部分で、「朝鮮半島から広島市に強制連行され」と明記している。追悼碑裁判における東京高裁の3人の裁判官が、最高裁判例の検証を怠ったのでなければ、高裁の逆転判決は出せなかったはずである。

また、今回の最高裁第二小法廷の「決定」は、高裁判決と2007年第一小法廷判決との齟齬(そご)を是正する必要があるのに、そのことに気づいていない。最高裁小法廷の5人の裁判官の他に調査官が関連する事案や判例について詳細な調査をすることになっているが、今回は、調査官も手抜きをしたと思われる。この点でも高裁判決と第二小法廷「決定」は欠陥である。このことは琉球大の高嶋伸欣名誉教授が指摘している。

(次ページに続く)

資料⑦ 「群馬の森の追悼碑」撤去以降を振り返って（２）

資料⑧ 戦後80年を問う群馬市民行動委員会（アクション80）事務局長として考えること

（前ページから続く）

7. 歴史否定に抗う

敗戦から80年経って、戦時下の塗炭の苦しみを体験した人が少なくなった。一方では、歴史の事実を政府が認めようとせず、教科書まで書き換え、さらに西田昌司の「ひめゆり」発言など、事実誤認や個人の妄想による発言を公職にある者が臆することもなく平然と行い、TPOを誤ったと撤回も拒む。西田が言う「自分たちが納得できる 歴史を作らない」との「歴史」とは、アジアの人びとも納得できるものでなくてはならないが、そのことへの思慮がまったくない。「歴史修正主義」と言われる歴史の事実を否定する言説は、社会のあり方を誤らせ、ヘイトを後押しし、国際社会の中での信頼を失うとともに、友好関係を構築していく大きな妨げとなる。

敗戦40年の西ドイツ国会で演説を行ったワイ ツゼッカー大統領は、「能うかぎり真実を直視しようではありませんか」との言葉で演説を締めしたが、この言葉をかみしめるべきである。

8. 国際社会のルールにも反する行為

1999年、ILOの条約勧告適用専門家委員会は、戦時中の朝鮮人の動員がILO強制労働に関する条約上の「強制労働」であると認定。しかし、日本政府はこれを否定する見解を出す。

2005年の国連総会で「重大な国際人権法、国際人道法違反の被害者の救済と賠償に関する権利の基本原則とガイドライン」が採択された。その内容は、

- 1) 歴史の真実を調査し公開するとともに謝罪すること／
 - 2) 被害者の尊厳や権利回復のための賠償を含む措置を講ずること／
 - 3) 再び起こさないための明確な行動をとること／
- となっている。

これについても、日本は1)からつまづいている。世界遺産登録をめぐる「軍艦島(端島炭鉱)」について、2021年、ユネスコは説明不十分として「強い遺憾」との決議を行い、「佐渡鉱山」の審議の中でも、ユネスコは、近代を含むフルヒストリーを盛り込むよう求めた。どちらも、朝鮮人の強制連行の事実を隠そうとした日本政府の姿勢を批判したものである。

9. あらためて「記憶 反省 そして友好」

石破首相は1月に「戦争の検証は今をおいてはない」と発言したが、戦後80年談話をめぐって、自民党内で安倍晋三の70年談話を石破の考え方で上書きされることを警戒し、談話の必要はないと主張する議員がいる。これらの勢力に押されて、日本は歴史否定を続けるのか。それとも違う道を進もうとするのか。このことが問われている。

私たちは、戦後80年の今こそ、これまで国として怠ってきた「記憶 反省 そして友好」と向き合うべきだと訴えたい。「記憶」「反省」のために は真摯に学ぶことが必要であり、「友好」のために は困難があっても対話の糸口を探し続ける不断の努力が求められる。

壊された追悼碑は、この社会にそう問いかけているように感じる。



←碑の跡地で「AR追悼碑」を見る（2025年8月）
※AR（拡張現実）

（「『群馬の森の追悼碑』撤去以降を振り返って」の文章は、川口正昭さんが「子どもと法・21通信」2025年8/9月号（通巻271号）に寄稿されたものを転載させていただきました。

「子どもと法21」<http://www.kodomo-hou21.net/>
「子どもと法・21通信・総目次」
<http://www.kodomo-hou21.net/tsushinindex.html>)

戦後80年を問う群馬市民行動委員会（アクション80）事務局長として考えること

1. 2024年1月29日から行われた追悼碑の解体・撤去とは……

- （１）植民地支配、強制連行の歴史を消し去ろうとすること
- （２）行政や裁判所の過ちを隠すこと
- （３）ヘイト行為を行政が後押しする「官製ヘイト」「ヘイト行政」
- （４）行政のいうことを聞かない市民団体への見せしめ
……（４）は、市民の権利や表現の自由、行政が本来行うべき役割に逆行するもの

2. 2024年5月11日 「追悼碑を守る会」は解散

・「歴史の事実を直視し、強制連行・強制労働の事実を掘り起こすとともに追悼碑を建立し、アジアの人たちとの友好関係を築こうとした先人たちのとりくみは色あせることはない。」と総括した。

・「歴史の事実を直視し、過去の過ちをくり返さないための市民運動を行う新たな団体をつくること」を確認して解散した。

3. 2025年5月17日 「戦後80年を問う群馬市民行動委員会（アクション80）」結成

その意義は…… 1.（１）～（４）に抗い行政や社会を変え

ること
（１）植民地支配、強制連行～安保法、追悼碑の撤去に至るまでの歴史の事実について検証を続ける。
具体的には、講演・報告・フィールドワークの案内の要請に応えるとともに、アクション80としても学習会やフィールドワークを開催する。

（２）行政や司法の過ちを丁寧に検証する。
具体的には、研究者や弁護士などと協力して、追悼碑撤去事件を冷徹に検証し、公表する。

（３）ヘイト行為を禁止する条例づくりをすすめる。
具体的には、県内の市町にヘイトスピーチだけでなくヘイト行為や差別行為を禁止する条例の制定を、自治体議員と連携してはたらきかける。

（４）山本知事の暴挙に屈せず、立ち上がる。
新たな団体「アクション80」の活動を活発化し、会員を増やしていく。

⇒ 当面、歴史の事実を直視し、過ちをくり返さないための活動を方針化する。碑の撤去もくり返してはならない歴史のひとつとして扱う。

4. 追悼碑の建立～追悼裁判～碑の撤去も、記録として残さなくてはならないと考える。

・旧「追悼碑を守る会」が刊行した、最高裁に向かうための資料まではあるが、それ以降はない。

5. そして、いつの日にか……

・昨年の総会（解散）でも、今年の結成総会でも、「角田義一さんが生前に残した『全国の仲間と協力してもう一度碑を再建したい』という言葉は重く考えている」と答弁した。

事務局長 川口 正昭

資料⑨ 「強制連行」「強制労働」を描いた映画から

エイジアンブルー 浮島丸サコン

戦中に日本に強制連行された朝鮮人労働者たちの帰国便として釜山港へ向かう浮島丸が1945年8月24日に舞鶴湾で撃沈された事件を題材にした劇映画。乗船していた朝鮮人労働者など549人が犠牲になったとされている。戦後の海難事故としては、「洞爺丸事件」に次ぐ犠牲者数にも関わらず、事故当時はもちろんのこと、いまもなお十分には知られていない。船は、朝鮮に帰る人々を乗せて、8月22日、青森県大湊を出港した。ようやく故郷に帰れると、乗り組んだ人は華やいでいたという。米軍の命令を受けて、浮島丸は、釜山に向かわないで東舞鶴の港に寄ることになった。そして爆沈した。いやいや連れてこられた「日本本土」で、鉄道工事などに動員されていた朝鮮人を、故国まで無事に送り届ける義務が日本政府にはあった。映画はこの史実を踏まえて、事件から50年の節目の年である1995年に、異国で「無念死」した人々の追悼の意を込めてつくられた。1995年製作／111分／監督：堀川弘通
配給：映画「エイジアン・ブルー（浮島丸サコン）」全国配給委員会配給（配給協力＊松竹）



三たびの海峡

韓国・釜山。70歳の河時根の元へ、戦時中ともに徴用で連行された在日韓国人の同胞・徐鎮徹が訪ねて来た。日本のことを一切断ち切っていた河の脳裏に、50年前の過去が蘇ってくる。太平洋戦争末期、若き河は北九州の小さな炭坑に連行され、朝鮮人を人間と思わず牛馬のようにこき使う日本人の労務監督・山本三次の下で地獄のような日々を過ごした。脱走を謀る者へは凄まじいリンチが加えられ、労働争議を起こした金などは自殺に追い込まれた。1995年製作／123分／日本／配給：松竹
監督：神山征二郎 出演：三國連太郎

よみがえる声

1935年3月、三重県に生まれた在日朝鮮人2世、朴壽南が、ライフワークとしてきた朝鮮人原爆被害者の実情と今日の課題に再び焦点を当て、約40年前から撮り続けていた16ミリフィルムを基に制作。広島や長崎で原爆被害を受けた朝鮮人のほか、長崎の軍艦島に連行された徴用工、沖縄戦の朝鮮人元軍属、そして日本軍の慰安婦にされた女性たちの声なき物語を描き出す。2025年／148分／日本・韓国合作／監督：朴壽南 朴麻衣
配給：「よみがえる声」上映委員会

証言 中国人強制連行

1942年秋、東条内閣は中国人の強制連行を閣議決定。主に中国の華北地方で行われた強制連行作戦によって、およそ4万人が日本各地の135の事業所に連行された。苛酷な労働と虐待で7千人近い死者を出した「中国人強制連行」。中国人被害者は犠牲者の無念の思いを胸に、元日本軍兵士は取り返ししようのない行為への反省を胸に、自らの体験を赤裸々に告白する。1995年／41分／日本 配給：日本中国友好協会本部

戦争の傷跡 一高槻地下秘密軍事工場（タチソ作戦）

戦時中、高槻市成合の山間部に掘削された高槻地下倉庫（軍の暗号でタチソ）の建設にあたって多くの朝鮮人労働者が危険な仕事に従事した。その実態を資料に基づき描いた作品。神戸大学出身で青丘文化ホールを大阪で開設、朝鮮通信使研究で知られる辛基秀（1931～2002）の監督作品。1984年／34分／監督：辛基秀 戦争の傷跡製作実行委員会

どんづる峯と柳本飛行場

奈良県天理市では、1995年に誕生した歴史説明板が、歴史修正主義者の天理市長により2014年4月18日に突如取り払われ、さらに市民のカンパで建てた説明板を、法律違反も犯していないのに、「違反している、直ちに撤去を」（天理市農業委員会）と迫った。これら行為を公人（市長、役人）が平然と犯しているところに、植民地支配末精算の闇の深さがある。今回上映する映像は2010年撮影の故藤原好雄さんのフィールドワークの様子と2018年8月に来られた遺族、金成嬉さんの証言を中心に編集した。2024年／34分／監督：金稔万

炭鉱からの逃亡（イ・ウンシク）NHKアーカイブス

番組「市民たちの戦争」で放送されなかった部分を含めた市民たちによる戦争の証言。内容：国民徴用令／過酷だった炭鉱での仕事／逃走／終戦、そして「解放」／今、振り返る日本での日々 イ・ウンシクさん：1926年北朝鮮・開城に生まれる 1943年朝鮮半島から三井田川に動員される1945年終戦後、朝鮮半島に戻る https://www.2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001110522_00000

抗い 記録作家 林えいだい

福岡県筑豊での戦争の悲劇や朝鮮人強制労働問題といった歴史の闇に葬られそうなさまざまな事実を、徹底した聞き取り調査によって記録し続けている記録作家・林えいだいを追ったドキュメンタリー。82歳という年齢で悪性のがんに侵されている林は、放射線や抗がん剤治療を続けながらも、現場に足を運び、史実を追い求め続けている。そんな林が作家人生の集大成として取り組むのが、旧日本軍の特攻作戦の影で若い兵士が殺された事件の裏に隠された、民族差別による冤罪疑惑の真相だった。

2016年／100分／監督：西嶋真司 朗読：田中泯
配給：グループ現代

オモ二と少年

炭坑で両親を失った日本人の少年。隣のお婆さんが、自分の死んだ子に似ていると言って引き取って育てる。彼女は戦争中に日本に徴用された夫の後を追ってきたが、事故で夫や子も失っていた。民族や血族を越えた母と子の絆を描く。『にあんちゃん』の北林谷栄が主演。

1958年／48分／監督：森園忠
教育映画配給社・民芸映画社提携作品

主戦場

慰安婦たちは「性奴隷」だったのか？「強制連行」は本当にあったのか？なぜ元慰安婦たちの証言はブレるのか？そして、日本政府の謝罪と法的責任とは……？次々と浮上する疑問を胸にデザキは、日・米・韓のこの論争の中心人物たちを訪ね回った。さらに、おびただしい量のニュース映像と記事の検証と分析を織り込み、イデオロギー的にも対立する主張の数々を小気味よく反証させ合い一本のドキュメンタリーに凝縮していく。2018年／122分／監督：ミキ・デザキ／配給：東風

軍艦島（韓国映画）

日帝強占期（韓国における日本統治時代の呼称）、長崎県の通称「軍艦島」（端島）で「強制労働」させられていた400人余りの朝鮮人が決死の脱出を試みる抗日映画。2017年公開／132分／監督：リュ・スンワン 配給：CJ E&M

資料⑩ 第83回 憲法を考える映画の会（2025/8/11）報告および参加者感想から（1）



第83回 憲法を考える映画の会は、2025年8月11日文京区民センター3A会議室で行われました。上映プログラムは、太平洋戦争末期の1944年、陸軍省報道部委託作品・情報局撰定国民映画として戦意昂揚を意図して作られた『陸軍』（木下恵介監督）です。宣伝や案内が遅れてしまっていたこともあって当日の参加者は少ないと思われたのですが、予想外に大勢の参加者がありました。以下は映画後の話し合いの概要や上映会参加票に書かれた感想です。

【映画を見て考えたことや知っている情報の出しあい】

（女性）①中村哲さんの母方の叔父さんが映画の話のモデルか？②作品はどの位の時間で制作されたのか？③最後の出兵式の行進、あれは映画のためのもの？ほんもの？等質問。

（男性）前の人の③に対する答え。長部日出雄さんの『天才監督 木下恵介』（新潮社）によると、陸軍がバックアップなので、行軍兵士も800人が映画のために出演。ただ補充兵部隊でそのままレイテ島に送られ帰れたのは20数名という。映画が、そのまま遺影となっている。

（男性）浜松市に木下恵介記念館（静岡県浜松市中央区栄町3の1）があって、館員の方が丁寧に解説してくれる。前記②の答え。制作期間は6ヶ月。木下恵介は何度も陸軍に途中で見せるのを拒んだ。反戦的と言われるより、作品をいじられるのを嫌ったという。（ラストの）「あのシーンがなかったら映画じゃないよ」と言った。

（男性）最後のシーンが印象的。新宿の住友ビルに平和祈念展示資料館があるが、そこでくれるクリアファイルに出征の息子を母親が追う絵が描かれている。あれはこの映画から採ったものだろうか？



（男性）あまり面白くなかった。戦意昂揚なんて感じない。どうして陸軍はこれを許したのか。「憲法を考える映画の会」がなぜこの映画を取りあげたのかも分からない。

（男性）全般的に勉強になった。おじいさんのことを思いながらこの映画を見た。ああいう家族は戦前の日本にたくさんあったのだと思う。教科書を踏んで怒られるところなど、昔に日本人は、あるいは今の日本人はそれをどう考えるかと考え、反省するとこともあった。

（男性）戦争映画が好き。今も京橋の映画アーカイブで戦後のGHQ接収映画コレクションをやっている。名古屋大学教授のピーター・B・ハーイ著『帝国の銀幕 十五年戦争と日本映画』に、この『陸軍』の撮影所に軍人が殴り込みを掛けてきた話があった。しかし、木下はいわゆる「軍国の母」というジャンルでこの映画を作っているということでは戦争を否定していないし、自分の子どもに死んで来いという母親たちに向けて作っている。戦意昂揚もののアートについては竹橋の近代美術館で展覧会が今、開かれている。

（男性）敗戦直前にこのような映画が作れたことの疑問の意見があったが、実際国民に欲しがりません勝つまではと云いながら軍部は財力・資材をほしいままにしていた。また新聞、映画なども迎合しない限り何もできなかったのは事実だ。

（女性）田中絹代のお母さんの描き方が細やか。とくに家族をすばらしく描いている。息子は天子様のもの、ゆくゆくは軍隊に捧げると主人公の母親（田中絹代）はそう思っていたが、実はそうではなかったというのがラストシーンか。手元資料にある秦早穂子さんはフランス映画を日本に紹介した人。その人の感じたこの映画の感想も貴重。今公開中の『よみがえる声』も素晴らしいので見てほしい。

（女性）大事に育てた息子を天子様の預かり物として戦争に行かせる、当時のそういう教育というか、戦争への考え方を随所で感じた。本土決戦に向けて国民をさらにどう戦争に向かわせるか国民の一体感を昂揚させようとした映画なのだろう。どれだけ日本の母親が喜んで子どもを戦地に送り出したかはやはり疑問。参政党が天皇中心の政治を言い出していること、非常に危ないものを気付かされる。

（男性）勉強になった。これだけの人が、これだけの発言をされていることにも力づけられた。『陸軍』は小説も読んだが映画とは全く違っていた。火野葦平がこの映画を見てどう感じたか知りたい。

（スタッフ）原作者火野葦平さんと従軍経験の経緯。小説の感想としては、従軍の家族に対して出征したことが無駄ではなかった、立派に戦って、立派に死んだと肯定的に思わせるもの。戦争の悲惨さにはあまり踏み込んでいない。資料に火野葦平の『陸軍』のあとがきを載せた。火野さんがどう言うことを考えていたかは分かる。

【参加票に寄せられた感想など（1）】

- 木下恵介が干されるわけだと思う。戦中にこれだけの映画がつくれたのかと思った。
- 出演した人々（エキストラ含め）は撮影中で戦争中だったわけだと感慨ひとしおです。
- 最後の方のシーンでは涙が出てきました。
- 当時の公開上映状況はどうだったのか気になりました。（よく陸軍省が許可したと思う。）（S.K.）

- パク・スナム監督の「よみがえる声」と彼女のそれ以前のドキュメンタリー 5 作品も一緒に上映して欲しい。（M.T.）

- 上映の機会ありがとうございました。陸軍は最初は「陸軍」の上映を認めたようですが、何回か見直したら戦意昂揚にならないと気がついたのでしょうか。上映許可→上映禁止という流れだったのでしょうか。そこが謎です。（I.I.）

- とても良かった。いろいろな意味でおもしろかったです。田中絹代さんはやっぱりすばらしいです。多くの女優さんたちは、この数年後には戦後の名作に出演されています。よく見てみると、戦中も戦後も俳優さんたちは変わらないんだと思った。木下監督も変わらないですね。軍部はダメされた。初めから見ていて監督はなんとか軍部の言いなりにならない表現をしたいと、四苦八苦していたように私には見えました。長回しがすごかった。照明部がすごいです。ラストは監督がやむにやまれずにしつこく描いた名シーンですね。息子がうれしそうだったのが印象的。反戦映画ですね。（K.I.）

- 戦後80年。私は生きて50数年…50数年は、その時の社会は実感できる。戦前の50年前は？あまりにも遠い昔のようですが、決して歴史の話ではなく、移りかわる社会であると明治からの世の中を感じた作品でした。（A.Y.）

（次ページに続く）

【参加票に寄せられた感想など（2）】

●先日公開中の「国宝」を観ました。一見、日本の伝統文化である「歌舞伎」をリスペクトしているようで、血統を重んじる“世襲制度”の気持ち悪さや“芸のためなら女房も泣かす”的な芸道の先にある『人間国宝』というさん臭さをテーマに描いた一種のレジスタンス映画のように思えた。

「陸軍」も一見、旧日本軍へのリスペクトを描いているように観せて、その実、人々の命や生活の尊厳をテーマにしたヒューマンイズム映画なのだと思う。

私は、木下恵介監督が独立プロダクションとして設立した「木下プロ」にフリーランスのドラマ、映画制作スタッフとして数年間かかわりました。(E.S.)

●戦意高揚映画ではあるものの、国（天皇）への忠誠・軍人勅諭より、家族（母子の情愛）のほうが優先されて終わっている。明治の政策はそれまでの儒教・孔子の教えを排除できていない。それに比して、戦後のほうが、民法改正で家族が崩壊しつつあり、支配権力は国民1人ひとりを支配しやすいのかもしれない。(S.S.)

●映画の内容も二部のトークシェアも大変勉強になりました。貴重な機会をありがとうございました。(H.T.)

●今回のような戦争中の映画、たくさんみたい。(Y.Y.)

●その後の日本を知っているだけに、とても奇妙な気持ちになりました。最後のシーンは圧巻でした。

そのシーンについてみなさんの意見が興味深くよかったのです。母親が最後走って軍の行進へ向かうところ、走ってころぶ所は、カメラも走って、ブレてる所は「勝手にしやがれ」を思い出しました。(K.Y.)

●最後の10分ぐらいだったでしょうか？よく撮ったと思います。伸太郎のりりしさが、知覧で見た特攻の青年像と重なります。桜木さんの母の姿などある意味での身近さ、実像？が濃やかに描れていると思いました。ありがとうございました。

▷この映画は「戦地」がほぼ映されてない。たんたんと生活の場の「今」を撮ってる。これは大きな特徴だと思います。(N.S.)

●とてもよかったです。ありがとうございます。(M.Y.)

●今、九段の昭和館で特別展「ポスター展」で「陸軍」のポスターが展示されています。1973年に、「戦争と人間第三部」を高校3年の時見ました。上映時間が3時間以上です。そこで①特高警察、②中国人捕虜をしばって新平の銃剣訓練をさせた③ノモンハン事件（戦争）のシーンが、見られたこと。(T.N.)

●当時の国の様子、市民の様子や思いがしみじみ感じられる。民衆の戦意に踊らされ、戦過の様子が伝わらず一方的な方向性に恐さを感じます。

先日、埼玉会館にて「さくら隊散る」ドキュメンタリーを観ました。核の被害者の実相を詳しく知れて絶対に廃絶しなければと想いを改たにしました。映画は素晴らしい。(M.K.)

●嫌を嫌と言える。いつまでも。(T.N.)

●陸軍、は、良かったです。最後の10分間のシーンはすばりしかったです。国策映画として作られたと思いますが、木下監督は、反戦映画だったと思います。(Y.F.)

●ありがとうございました。(A.K.)

●1944年に製作発表されたプロパガンダ映画を観るのは初めてでしたが、それが、この“反戦”気分を催すものだったとは…映画が持つヒューマンイズム精神がどうしてもにじみでてしまうのだと感じました。「新しい戦前」となった今、まだ声を上げられるとはいいつつ、口をつぐまされている人、気づかれない人々がいる中で、1944年とは違った意味で“反戦”映画を作らねばならないと思いました。(Y.S.)

●。上映中でも帽子をかぶったままの人が7～8名いました。上映前に、帽子を取るよう注意のアナウンスを徹底してください。よろしくお願いします。

●今回の上映は、とても貴重な機会でした。

いろいろな考えさせることの多い作品だと思います。

手元資料がとても充実しているので、じっくり読んで勉強しようと思います。

●トークシェアでは、参考になる意見をたくさん聞くことができ、おもしろかったです。ありがとうございました。(M.T.)

●今回の上映は、とても貴重な機会でした。いろいろな考えさせることの多い作品だと思います。手元資料がとても充実しているので、じっくり読んで勉強しようと思います。

トークシェアでは、参考になる意見をたくさん聞くことができ、おもしろかったです。ありがとうございました。(M.T.)

●木下恵介監督！杉村春子、田中絹代、笠智衆、東野英治郎、佐分利信、佐野周二の若き日の映像、懐しく興味深くみました。反戦映画です。幕末の小倉から、奇兵隊の攻撃からはじまった映画。S19年12月に公開？どのぐらいの人たちが見たのでしょうか。(M.S.)

●この作品についてはおぼろげな知識しかありませんでした。ラストの壮行会の場面、迫力ありました。福岡市の大通りであれだけの口ケをしたとは、圧巻です。シナリオでは、1行だけなのに、ああした場面になるとは、戦意高揚のさすがが厭戦の感情が上回りました。80年の時を経ても、学ぶべき点、多々ありました。（追、当時40才前後だったはずの笠智衆、東野英治郎、上原謙、三津田健の姿、新鮮でした。）

（伊丹万作について論じる機会、作れませんか。映像作品、評論文、採り上げていただけたらと思います。伊丹の「戦争責任について」のエッセー、多くの方に知っていただけたらと感じています。

（事情が許せば故吉永春子さん（元TBSプロデューサー）の作品、上映できればと感じています。戦前の日本の暗部について、描かれた作品があります。「731部隊」「帝銀事件」「さすらいの未復員」（戦時に精神を病んだ兵士の話です）などなど。ご検討の程を。(Y.O.)

●右翼の人達。例えば参政党の人たちが見たら、充分利用されるプロパガンダの映画になると思います。恐い映画だと思いました。（無記名）

●映画は時代と共につくられるものであるから、複眼的に見る力が観客にも（本当は）求められるのではないかと感じました。映画だけでなくお話しも大変勉強になりました。

ありがとうございました。（無記名）

●「陸軍」列をなす人気がりに驚きました。（初めてです）私自身「国策映画かぁ」などと思って参加したものですから。しかし観始めたら普通に見られるという面白いじゃんみたいな。さすが木下恵介監督と言うべきか。笠智衆さんの3回ほどのボケもあり。（あれ、オレ洗脳される？）と思ったら、上映禁止だったんですねー（帰りに資料をもらって知りました。途中、中座したもので）嵯峨出身の私としては、九州弁が聞くに堪えないところが気にはなりました。（O.K.）

第85回 憲法を考える映画の会

日時：2025年12月7日（日）13時30分～16時30分
会場：文京区民センター3A会議室（春日駅・後楽園駅）

*プログラムはまだ決まっています。

憲法映画祭2026

日時：2026年4月18日（土）10時～
会場：文京シビックホール小ホール（2階）

毎年、憲法記念日の前の休みの日に開催してきた「憲法映画祭」来年は10回目になります。このところホームグラウンドようになっていた武蔵野公会堂ホール（吉祥寺駅南口）は来年、再来年と改装工事になるので、来年は**文京シビックホール小ホール**（341席）を予約しました。

上映プログラムや詳しい案内をこれから半年かけてつくっていききたいと思います。

むのたけじ反戦塾「節目の学習集会」の報告

「戦争はいらぬ、戦争をさせぬ世へ」の具体的な実現をめざした学習会「むのたけじ反戦塾」は2022年12月から12回の学習会を行ってきました。その10回までの参加者の発言をまとめた記録集を作り、8月30日「節目の学習集会」を行いました。

この「むのたけじ反戦塾」記録集をお求めの方は下記住所までご連絡ください。（送料込み500円）

なお、「むのたけじ反戦塾」は、そこで話し合われた反戦実現のための具体的な成果を、さらに整理し、形を変えてまた続けて行く予定です。しばらく検討のお時間を下さい。

* 問合せ先：090-4599-5314 武野
〒338-0006 さいたま市中央区八王子
4-7-10-201
E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

「シネマDE 憲法」 旧作転載のご案内

「シネマDE 憲法」は、法学館憲法研究所のホームページのコラムで、憲法に関わる映画を2004年6月から2025年8月まで1000本以上紹介してきました。

このたび、許諾を得て、のその2004年からの紹介記事を「憲法を考える映画」のホームページ

（<http://kenpou-eiga.com/>）に毎日順次転載し紹介していくことにしました。ホームページ右欄の「カテゴリー」の「シネマDE憲法」からお入りください。

古い作品であっても、憲法について考えることができるこんな映画があったのかと、見てみたいという気持ちになります。映画会のプログラムを考える上でも役立てていきたいものです。そしてゆくゆくは上映会を誰でもできる「憲法を考える映画」のデータベースにしたいものです。

ホームページをご覧になってみてください。

上映会・催しの案内

10月6日（月）11時、16時、19時『だあほ！！～バギヤん、愛と怒の遺言～』（ギャラリー古藤＝江古田駅）

第10回ねりま沖縄映画祭2025 くわたしの沖縄 あなたの沖縄>

10月11日（土）10月12日（日）共に19時『勝ちちゃん——沖縄の戦後』（Coconeri 3階 練馬区民・産業プラザ＝練馬駅）

10月13日（月・休）18時・10月25日（土）19時『SANSHIN ～三線～』（13日練馬区役所地下会議室・25日Coconeri＝練馬駅）

10月26日（日）19時『【NDUの世界】アジアはひとつ』（Coconeri＝練馬駅）

10月31日（金）18時半『遠いところ』（Coconeri＝練馬駅）

11月2日（日）10時、13時『骨を掘る男』、16時『ひめゆり戦史 いま問う、国家と教育』（練馬区役所 地下多目的会議室）

11月16日（日）18時『オキナワより愛を込めて』（練馬区役所 地下多目的会議室）

11月23日（日）19時『沖縄エロス外伝 モトシンカカランヌー』（練馬区立生涯学習センター＝練馬駅）

11月24日（月・休）19時『劇場が終わるとき』（練馬区立生涯学習センター）

10月11日（土）14時～ シネクラブ例会『博士の異常な愛情～または私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか』（向原ホール＝小竹向原駅）

10月12日（日）13時～ 『原発をとめた裁判長 そして原発をとめる農家たち』（日比谷コンベンションホール＝霞が関駅）

10月12日（日）14時～ 映画『母と子の絆～カネミ油症の真実』上映会（文京区民センター＝地下鉄春日駅・後楽園駅）

10月13日（月・休）13時半～ 『知事抹殺の真実』（茨木市立男女共生センター＝阪急茨木市駅）

10月13日（月・休）14時～ 『憲法を武器として 恵庭事件～知られざる50年目の真実』（文京区民センター＝地下鉄春日駅・後楽園駅）

10月15日（水）16時20分～ 『よみがえる声』（山形市中央公民館ホール＝山形駅）山形国際ドキュメンタリー映画祭クロージング上映

11月4日（火）19時～ 『医師 中村哲の仕事・働くということ』（東京ボランティア・市民活動センター＝飯田橋駅）